

郷土の古代と史跡をめぐる（その2）

2017年 月

- 散歩コース 別紙「子母口～たちばな古代の丘マップ」pdf 参照、(A～G→I→H→喜楽里温泉
経由、バスで溝の口（解散 or 手ごろな居酒屋）へ (詳細は、配布のパンフを参照)

<（その1）の場所から降りて矢上川から子母口住宅前まで歩く (子母口) の今昔図と地名の由来>



「しばくち」と読む。その名の由来は種々な説があるが要約すると

①1266年(文永3) 「風土記稿」に渋口郷の名がある。
「渋」＝金渋(鉄錆)が出る河口という説

②橘樹神社の神木から神木のある地(神木地)説

③縄文時代は、多摩川の河口で「潮口」と呼ばれていた説

④「しぶ」＝谷でこの一帯が矢上川の谷の入り口を指すことから呼ばれた。

でも、どれが正解かは？

はっきりしているのは、

蓮乗院の墓石

1681年(天和元)

「渋口村」の刻銘

同院の庚申塔

1691年(元禄4)

「武州子母口村」とあり、この10年の間に村名が変わっている。

左の今昔地図は、下記参照
埼玉大教育学部の
「今昔マップ on the Web」
<http://ktgis.net/kjmapw/>

＜子母口貝塚＞

縄文時代早期の子母口式土器を出土した標式遺跡として、考古学史上広く周知されている。標高 26 メートル前後の台地の縁辺に五地点（A～E 地点）に分かれて散在してたが、宅地化が進み一部では盗掘もされるようになって、川崎市が一部を買い上げ公園化した。昭和61年に川崎市市民ミュージアムが、貝層剥離資料を収集し、現在常設展示している。

貝層の厚さは、15~25cm で、貝類は 23 種におよぶが、主体を占めるものはマガキ (47%)・ヤマトシジミ (18%)・ハイガイ (11%) で、そのほかにオキシジミ・ハマグリ・オオノガイ等が確認されている。魚骨は、ススキ・クロダイ・マダイ・サメ等の近海浅瀬の棲息魚である。

これらの自然遺物から、今から 7,000 年ぐらい前の子母口貝塚周辺は、内湾的水域で、地理的には湾奥部に位置していたものと推定されている。

ちなみに当時の海岸線は、縄文海進の影響ですぐ近く（約 1 Km）まで、海が迫っていた。

（住居跡は未発見）



約7,500~7,000年前の古地理

子母口貝塚公園内の解説板「子母口

貝塚の貝層と発掘調査のあゆみ」の横に貝層の実物標本があるので、お楽しみに！

＜橘樹神社＞

社伝：倭建命東征の折海が荒れ、弟橘比売命が入水して海神を鎮められた。その後比売命の着物、冠が漂着した地に廟を建て、更に二柱を祭る社が建立された。神社の東方百メートル程の丘に廟があったと伝えられる。

橘樹郡の郡名は、当神社の社名よりつけられたといわれ、郡中の総社として多くの崇敬者を集めた。

社殿は元禄元年再建、嘉永四年には郡中一二四ヶ村に寄付を募り再建、昭和四十二年社殿を改修。

（神奈川県神社誌より）



＜富士見台古墳＞

一説には弟橘媛の「御陵」であるとも伝えられているが、6世紀頃に造られたもので、当時のこの地域の有力者の墓であるとする説もある。また、橘樹神社の社伝の、「この地に漂着した冠の具(御櫛)」を納めた廟が富士見台古墳ともいわれている。

現状は直径 17.5m、高さ 3.7m の円墳。築造当時は 1 辺約 22m、高さ約 4m 以上の方墳だったようです。内部構造は未調査のため不明。

＜橘樹郡衙推定地＞ <<・・・たちはな古代の丘縁地

平成27年3月 川崎市初の国史跡となった。橘樹郡衙とは、古代武藏国にあった21郡の一つである橘樹郡の役所跡。1996年～2013年の15次調査で郡庁は確認できていないが、正倉に関連する掘立柱建物跡が発見された。

正倉は、飛鳥時代後葉（7世紀後期）から9世紀初の衰退・終焉まで4期の変遷（位置・規模等）を迎ったと推定されている。

I期の建設には、朝鮮半島渡来系の有力氏族が大きく関与

衰退理由：全国で正倉の火災多発に伴う新造の場合の間隔制限、複数の郷の中心への正倉別院の設置指令など
(太政官符)

詳細は、ガイドマップ参照（当日配布予定）
(正倉のイメージ図)

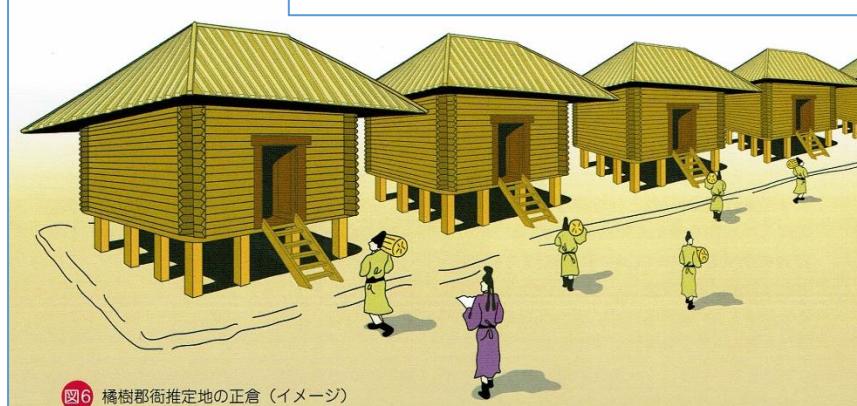


図6 橘樹郡衙推定地の正倉（イメージ）



木造聖徳太子立像

＜影向寺＞

南関東屈指の古刹で、境内の発掘調査で発見された文字瓦から7世紀末の創建と考えられている。
薬師堂（本堂）の本尊「薬師如来両脇侍像」や
太子堂の「聖徳太子立像」（共に木造）が有名

溜まった水で眼病が治るという「影向石」、乳の出が良くなる「乳イチョウ」などの見所がある。



木造薬師如來両脇侍像（影向寺）